

日本橋には銀行が集中している。また、隣の兜町には東京証券取引所をはじめ証券会社が集中しており、日本橋、兜町一帯はウォール街につぐ金融のセンターである。兜町、小網町を経て人形町で解散。

3月1日。10:00、門前仲町に集合。ここは深川不動、富岡八幡を中心として江戸時代から続いている町である。現在、地盤沈下などの問題があり、環境が悪いために人口は減少している。木場へ向かう。木場は材木問屋、製材所の中心地区である。以前は多数の運河が走り貯木場を連ねていたが、現在は材木の筏輸送がトラック輸送にかわりつつあるので、小運河や貯木場は埋め立てられるものが多い。佃島へ向かう。ここでは漁村のなごりが見られ、また、狭い土地がむだなく利用されていた。佃大橋を渡り、築地中央卸売市場へ。見学後、柴又へ向かう。柴又は帝釈天の存在で知られ、その門前町として発達した町である。帝釈天で解散。

3月2日。10:00、多摩プラザに集合。田園都市線に沿った梶が谷〜つくし野の多摩田園都市は、多摩丘陵の最初の開発であり、現在は人口20万であるが、完成後は40〜45万になる予定である。多摩プラザとつくし野の住宅地を見学した。多摩プラザには個人住宅だけでなくアパートも見られたが、つくし野は個人住宅だけであった。また、つくし野では住宅地は伸びているが、駅前に東急ストアができてから商店街はほとんどつぶれてしまった。新横浜、横浜を経て伊勢佐木町で解散。

この巡検によって、これまで知らなかった東京のいろいろな面を知ることができた。遠くの知らない土地への巡検だけでなく、身近な土地を歩いてみることもおそらく有意義なことだと思う。

(正井先生指導 3年 原口和子)

## 戸 隠 巡 検 (10月17~20日)

我々にとって最後の巡検となった戸隠巡検は、教官お二人、三泊四日、しかも連泊と、初めての試みが多かった。生憎雨に祟られて残念だったが、それでも自然、人文の両分野共に盛りだくさんのスケジュールだった。

今回の巡検のテーマは、1)長野県上水内郡鬼無里村地すべり地の観察と、2)同郡戸隠村の集落形態の観察、の2つに大別される。

鬼無里村地すべり地区で顕著なものは、萩の峰であって、これは融雪期の地表水に起因する。したがって地下水を原因とするゆっくりとした一般的な地すべりとはその景観を異にし、ちょっと見には土石流に似た状態を呈す(崩解性地すべり)。10月17日、初日から鬼無里村へバスで出かけた我々は(泊りは戸隠村)そこに山と言わず谷と言わず猫の額ほどの土地を切り開き切り開きして、ひたすら生きてきた山村の人々の生活を見た。その昔平家の落人が隠れ住んだとか、京都から美しい上ろうが流されてきたとか、鬼無里に関する伝説には事欠かないが、昭和も50年を数える今日、「小京都」と称して観光地の名のりを上げたこの村を見る時、今までの生き様が懸命であればあるほど麗々しいキャッチフレーズが白々しく思える。崖の上の悪路と、村を捨てた人々が残していったすすきばかり

の畑や朽ちかけた茅屋根と、山腹を無惨にえぐった地すべり跡と、そして今にも泣きだしそうな空模様とが、我々にこの村の抱える問題の大きさを強く印象づけた。

18日も19日も雨だった。戸隠村の中社、宝光社でそれぞれ聞き取り調査を行なう。戸隠村は戸隠神社を中心に発達した村で、神社の威力があちこちに残存していることに驚かされた。特に旅館の経営はかつての神官（社中と言う）の家系の者にしか許されぬという鉄則が、戸隠村全体の旅館の数を昔から1件も増加させていないことは、この村における戸隠神社の位置を物語っているとさえ言う。ただし今はやりの民宿はスキー場の完備に伴いこれと関係なく増えている様である。

翌20日はやっと晴れ。飯縄山に登る。正確に言うと飯縄山中腹まで登る。ということになる。眼下に戸隠から鬼無里、戸隠山、荒倉山、そして遠く北アルプス連山を望み、少々人間臭さが恋しくなってきた我々も、北信濃の初秋の一日を満喫し、巡検最後の日を終えた安堵感につつまれた。

（浅海・斎藤先生指導 3年 牛山喜美子）

## 上高地巡検（6月28～30日）

第1日は降ったりやんだりするぐずついた天気の中を、京大防災研を訪ねて焼岳土石流についてのお話を聞いた後、地形、地質、植生を見ながら大正池、田代池を通して河童橋の近くまで行った。土石流は日本国中どこでも起るが、焼岳では毎年数回は起り頻度が高い。土石流の恐しさについては、私の家のある神戸市灘区の六甲山のふもとでも梅雨末期の集中豪雨の時に時々起るので何度か実際に見たことがあるが、土石流の正体について少しなりとも知識をもてたことは今回の巡検の収穫であった。土石流についての地味で根気のいる研究が続けられていることや、ネット形式のダムなどの新しい試みが行なわれていることも、今回の巡検で初めて知った。第2日は晴天に恵まれて、上高地から上々堀沢にそって登り中尾峠を越えて中尾に出た。この日の収穫は何と言っても今までに授業で習ったことを自分の目で確認できたということである。上高地側の土石流扇状地、中尾側の堆積段丘がはっきり見られたこと、古成層と焼岳火山岩を識別できたこと（上高地にも中尾の段丘堆積物にも見られた）。また山地のいろいろな植生及びこれが亜高山帯と山地帯とでは植生が異なること（植物地理の時間に、欧米では不明瞭な亜高山帯が日本では明瞭であると習ったばかりである）などである。また旅館の御主人から、中尾の今昔についてのお話もうかがった。中尾は以前は交通の便の大変に悪い、農業を主体とし猟もする山村であったが、温泉が出てから農業をやめて旅館を経営するようになったところが多いとのことである。第3日も晴天に恵まれ、京大防災研を訪ねてお話をうかがった後、蒲田川の支流にそって歩いた。中尾側と上高地側とではずいぶん景観が異なり、上高地側では上々堀沢がごつごつした大きな岩だらけであるのに対し、中尾側では川岸には小さな（上高地側に比べて）石が堆積していて上高地よりも古い時代に土石流が起ったことがわかる。

（式先生指導 4年 石上まり）